

朋友だより

今年最後の朋友だよりをお届けします。

前回に引き続き、本の紹介です。2回連続で本の紹介になってしまい、

読者の皆様には「またか」の想いをもたれるかもしれません。

しかし私としては、是非とも紹介せずにはおれない著書です。

ご参考になれば幸甚です。

2017年12月

(有)コンサルタント朋友
代表取締役 奥長弘三



『空洞化と属国化』を読む



電機産業・自動車産業の空洞化

坂本雅子著『空洞化と属国化-日本経済グローバル化の顛末-』(新日本出版社 2017年9月)を読みました。全776頁の大著ですが、日本経済のおかれている現状を知る上で、必須の本と考えます。出来るだけ本文に則りながら著者の主張を紹介します。

日本の電機企業は戦後早くから海外進出し、韓国や台湾などの多くの企業を部品や下請工場として育成したが、1990年代以降には直接的な技術供与や委託生産を繰り返してきた。技術を底抜けに流出させながら、日本企業同士がバラバラの競争を繰り返し、自社のみ利益追求と短期的な業績向上だけを目指した。その結果、アジア企業を育て、アジア企業に敗北して「ファブレス化」に逃げ込んだ。(同書P.172)

日本電機産業は、2010年代に生産全体の崩壊過程ともいべき段階に入った。生産の海外移転の果てに、巨大電機メーカーの工場が閉鎖され、買収され、シャープのような大メーカーも台湾企業に丸ごと買収された。百数十年の歴史を持つ日本の名門企業、東芝も、中核部分を身売りすることになってしまい、存亡の危機に瀕している。(P.104)

自動車産業は国内製造業出荷額でもトップを走り、2014年でも60兆円と国内の出荷額全体の2割を占めている。(中略)自動車は日本経済の最後の砦といっても過言ではない。(P.189)

日本の自動車メーカーの海外生産は、ひたすら増加を続けている。2007年国内生産を上まわり、2015年には国内生産の2倍となった。日本国内での自動車生産は、1970年代末の水準にまで低下しているが、それはひとえに自動車各社が、生産を海外に移転したことによる。(P.204)

車の部品でも輸入が拡大している。2010年代に入ると、特にアジアからの安価な部品輸入が急増している。(P.216)

完成車メーカー各社は、今後も生産拠点圏、「最適地」国へは惜しげもない投資を加速するが、老朽化した国内工場では、ラインの削減も始まっている。

いずれの面からも、国内生産はシロアリに喰われるように、土台から蝕まれつつある。自動車産業の空洞化は、すぐそこに迫っているといえよう。(P.272)

戦後60年かけて培ってきた日本国内の自動車の生産、今も世界全体の生産量の約3割を日本メーカーが握る自動車の生産、世界での需要が今後もますます拡大することが予想される自動車の生産において、国内生産をいとも簡単に諦めて、新産業分野なるものの育成に精を出すのが合理的な選択なのだろうか。(P.273)

安倍成長戦略「日本再興戦略」

「日本再興戦略」(2013年6月公表)は日本資本主義の構造そのものを転換させるための政策となっている。その目指す構造転換の一つは日本の資本主義を「ものづくり」を基礎に置く資本主義から決定的に決別させ、米国型の「機関投資家資本主義」と呼ばれる構造へと転換させることである。

(中略)もう一つは「規制撤廃」「民営化」のための諸施策で、公共性を重視すべき労働や医療、介護、エネルギー等々の分野までも、国内・国外の民間企業や投資家による寡占に委ねる資本主義への構造転換を強いるものである。(P.374)

この「日本再興戦略」の本質を知る上で、最も重要なことは「規制撤廃」「民営化」の総仕上げも、「機関投資家資本主義」への転換もすべてが、米国政府から日本政府に突きつけられてきた要求に端を発したものだということである。米国は1990年代以降、毎年日本経済と社会システムに対する膨大な項目からなる要求を突き付け続け、日本の経済、社会構造の転換を迫ってきた。安倍内閣の成長戦略の殆どの項目は、その米国の要求に基づいている。(P.375)

機関投資家重視の経営で、日本の企業は稼ぐ力を取り戻せるのか。米国の資本主義は「機関投資家資本主義」「ファンド資本主義」というべきものに転化してしまい、ものづくり資本主義の道を自ら圧殺してしまい、二度と戻れなくなってしまったのである。(P.474)

米国の要求に屈服し、米国流の土俵に上がる道ではなく、日本には日本の進む道があるはずだ。ものづくりを放棄せず、発展する道を選択する余地が今ならまだなんとか残っているのではないか。それが日本の圧倒的多数の企業にとっても、存続し続けられる道ではないか。(P.520)

TPPの本質-空洞化と属国化の協定

トランプ政権が TPP から離脱したことで、TPP はつぶれたが、アメリカは必ず、日本に対して二国間協定を要求することは間違いない。そのとき、TPP が交渉の土台になることは明らかであるから、今こそ、TPP の本質について理解することは重要であると著者は強調します。

TPP は「自由貿易」を拡大し、先進国の工業生産と輸出を拡大することに主眼が置かれたものではなく、投資の自由化を推進することに重点がある協定であり、投資相手国で企業が活躍するための企業の後ろ盾、法的守護である。(P.682) いわば多国籍企業の王国を築くための法整備といえる。

(P.630) それは米国が「規制撤廃要望書」で長年かけて日本を改変し、歪めてきた項目と多く共通している。TPP はまさに「空洞化・属国化の協定」なのだ。(P.633)

TPP は国民に何をもたらすだろうか。それはアメリカの国民が、TPP の原型である NAFTA (北米自由貿易協定)をどうみるかで解ります。

トランプ大統領が TPP 反対だけではなく、有力な大統領候補はすべて TPP 反対だった。米国民に選ばれるには、TPP に反対することが不可欠だったのだ。(P.745)

TPP のような NAFTA 型投資自由化協定が、多国籍企業の母国民には何をもたらすかを教えてくれる。(P.746)

産業空洞化は、経済の「グローバル化」なるものの本質を明らかにしてくれる。この 30 年近くの間、世界を席卷した経済の「グローバル化」なるものの核にあるのは、

結局、企業の国外への投資、とりわけ生産の国外移転であった。(P.751)

しかし、今、世界の国民は、企業本位のグローバル化が大きく進展したこの 30 年間からの転換を模索し始めている。グローバル化とは企業の母国には、とめどない産業の空洞化をもたらすもの、国民の職の喪失、貧困化をもたらすだけのものだと、世界の多くの人が考え始めた。(P.752)

日本でも進行する産業空洞化に対するリアルな認識を大多数の国民が共有し、生産の移転は企業の自由であり、企業競争の勝利には不可欠という論理を金科玉条にしている時期はもう終わった。(P.752)

あとがきに見る著者の想い

同書のあとがきには著者の想いが存分に記されています。長文ですが紹介します。

(前略) 私は 1945 年に生まれた。日本人が戦争の傷跡にもがきながらも、戦争は二度と嫌だという強い思いを持ち、行動した時代に育った。朝鮮戦争やベトナム戦争など、アジアでの戦争が絶えない時代ではあったが、自らの人生をかけて正義や民主主義、平和を守ろうとする多くの日本人がいた時代でもあった。

ところがいつの間にか、日本の社会には薄い紗の帳が一枚また一枚と降ろされ、社会の真の姿が次第に見えなくされていった。帳の中では許容された範囲の言説だけが声高に響き、嘘ではないが、選択された情報が時の要請に応じて大音量に流されるようになっていった。

私たちの世代は、まだものが見え、見えるように光が当てられた時代があったことを知っている。戦後史とともに生きてきた私たちには、若い世代には見えない紗の後ろに隠されたものを見抜く力が未だ残っている。この目に見えたことを実証しておく義務があるのではないか。グローバル化の果ての激動が戦争やテロの時代に帰結することを何としても防ぐために、本書はそんな思いから執筆した。(後略) (P.776)



今年一年をふりかえる

2017年もあとわずかです。今年一年をふりかえってみます。

私にとって、今年の最大の成果は二つの大著にめぐり合ったことです。

一冊目は迫り来る地球温暖化の危機を見事に表現した、ナオミ・クライン著『これがすべてを変えるー資本主義VS気候変動ー上・下』です。二冊目は日本経済の現状を緻密な分析を通して解明した坂本雅子著『空洞化と属国化ー日本経済グローバル化の顛末ー』です。

いずれも朋友だよりの前月号と今月号で紹介させていただきました。二冊とも現代社会に対する重大な警告の書と考えます。

また来年以降の展望につながる出来事を国際面、及び国内面の双方で一つずつ挙げると、国際面では、今年7月7日に国連で採択された「核兵器禁止条約」であり、国内的には10月22日の総選挙で確認できた「市民と野党の共闘」が健在であることでした。

「核兵器禁止条約」はヒロシマ、ナガサキの被爆者の方々が、72年間倦まずたゆまず世界に訴え続けたことが、やっと世界を動かした画期的なものです。核兵器保有の大国や日本が反対する中で条約の採択は、世界を動かすのはアメリカやソ連などの大国ではなく、国連に結集する国の大小による序列のない世界であることを明確に示されたことでもあります。

国内に目を移すと、10月に突如、実施されることになった総選挙をめぐる動きです。それまでの流れのまま、総選挙が実施されれば、共闘派が勝利する可能性が大きいと報道された中で、直前になって市民と野党の共闘に大きな逆流が持ち込まれました。希望の党の立ち上げと民進党の解体です。しかし、市民と野党の良識と熱意がこの逆流をくい止め、市民と野党の共闘が健在であることを示し、いくつかの選挙区で成果をあげました。

日本の歴史の中で、今までに経験してこなかった市民と野党の共闘が妨害をはねのけ、存在し続けたことは来年以降の日本の政治に希望を見ることができます。

一層の発展を祈っています。

～*～*～ あとがき ～*～

朋友だより149号をお届けいたします。

友人が電車を降りてすぐに忘れ物に気が付き、幸い終点でしたので事なきを得ました。降車するときには常に「見返り美人をすること」が肝心と言われ、以来私自身も電車の乗り降りの都度思い出しています。今年も残り少なくなり、今年の自分を振り返ってみました。何といたっても日付変更線を初めて超えた『ハワイへの旅』が一大イベントでした。非日常のゆったりした10日間のリゾート気分を味わいました。人生のリフレッシュとはこのことだと思い、忘れがたい良い思い出となりました。

年末・年始、出かける機会も多いと思います。皆様、お忘れ物にはくれぐれもご注意ください、良い年をお迎えくださいませ。(野上)



朋友

有限会社 コンサルタント朋友
〒113-0022 東京都文京区千駄木 3-36-11
千駄木センチュリー21 602号
TEL. 03-5815-3021 FAX. 03-5815-3022
e-mail foryou91@tokyo.email.ne.jp
[URL:http://www.consultant-hoyu.co.jp](http://www.consultant-hoyu.co.jp)